

『坊っちゃん』のことなんて、何も知らなかった。

—2016年度 教育学部FDシンポジウム—

国語教育講座 佐藤 栄作

0 はじめに

本学へ着任が決まったとき、「アクセントの宝庫だから、君にぴったりだ」と言われた。

日本語、日本文学、日本史などは、地域とつながる研究テーマが必ず存在する。特に、私の場合は、伊予の隣の讃岐アクセントを研究していた。地域研究の難しい分野の先生方にとっては、まったく「うらやましい」領域だと思う。ならば、それができていない現状は、「反面教師」にもならず、本日の話題提供者としては不適格である。

若手教員では言いづらいことを言うのが、今回の役目だと思って引き受けた。

1 『坊っちゃん』との出会い

端的に言うなら、地域ならではの研究テーマは、われわれが研究者で有り続けることを支援してくれる。「幅をひろげてくれる」は言い過ぎの場合が多い。そんなにいろいろできない。誤解を恐れずに言うなら、「三流にならない」ために地域の特色ある研究がある。

採用された段階では、皆、見どころがある（「三流」は採用されない）。着任してから、注意すべきは、その大学のそのポジションだからあてがわれる仕事を、己の力を認めてくれたから来た仕事だと勘違いすること（いわゆる広義の「当て職」）。地方国立大学の教員の場合、他に大学・研究所等が少ないため、いくつかの仕事が来る。ここに安心してしまうと危険である。

さて、私の場合、まずやるべきことは、方言アクセント調査、方言調査だった。島嶼部や南予、東予など、いくつか回り、少しは調査した。

愛媛大学の日本語学担当教員だから、愛媛の方言について、電話での問合わせがある。これらへの対応のために愛媛方言を知ることは必要でもあった。

愛媛の方言といえば、瀬石の『坊っちゃん』（獅子文六、大江健三郎、司馬遼太郎・・・）。特に『坊っちゃん』の方言を知っておかないと愛媛大学の日本語学教員として恥ずかしい。

着任してすぐ、『坊っちゃん』について教わるために、松山坊っちゃん会に入会。色々勉強になったが、何年かすると顧問を頼まれた（愛大教員だから）。これが「広義の当て職」である。

『坊っちゃん』には自筆原稿（複製）があることを知る。前の職場（女子短大）で、「丸文字」に出会って、文字に興味を持っていたので、瀬石の書く文字に注目して読んだ。すると、『坊っちゃん』自筆原稿には、瀬石以外の手による書き込みがあることが見つかった。このことは、すでに指摘されていたが、文学研究ではしっかり取り上げられておらず、一般には知られていなかった。子規博の資料などで、それが高浜虚子の手であることを証明した（つもり）。

2 『坊っちゃん』からいくつかの研究テーマが

『坊っちゃん』自筆原稿に出会ってから、私にはいくつかの研究テーマが生まれた。

まず、「字体研究」。『坊っちゃん』の自筆原稿の分析から、瀬石と虚子との筆跡の相違。これは、同一字体の実現形が異なるということ。瀬石の書く異体字、異体仮名から、現代の漢字や仮名の形をとらえ直すようになった。

この「字体研究」の成果の一つとして、2013年に単行本を刊行することができた。論文集ではなく一般書に近いものである。また、文化審議会国語部会漢字小委員会の委員を委嘱され、2015年度一年間務め、「常用漢字表の字体・字形についての指針」とりまとめ作業を行った。「字体研究」のお陰で声がかかった。

次に「瀬石の自筆原稿の研究」。瀬石の自筆原稿は『坊っちゃん』以外にも残っており、『心』の自筆原稿や『道草』の書き潰し原稿の分析を対象を広げた。このテーマで、科研の萌芽研究、基盤研究（C）が獲得できた。

また「文学作品の中の方言」では、愛媛ならではの「写生」と方言との関係、最新研究である「役割語」との関係を見るというテーマで、科研の挑戦的萌芽研究が獲得できた。

さらに『坊っちゃん』は漱石が小説家になることを決定付けた作品であり、「作家漱石の誕生」というテーマを得た。原稿への虚子の書入れから出発し、子規・虚子との関係を研究するようになった。その成果の一部を、2015年、虚子の孫稲畑汀子氏とダブル講演の際に話したところ、稲畑さんにたいへん喜ばれた。教研国語部会でも「坊っちゃん成立論」を講演した。

足場・発射台（問題意識）と発射角度（切り込み方）さえ定まっていれば、地域に向かって撃てば必ず何かに当たるはずである。

科研の申請では、研究テーマを必ず地域に絡め、愛媛松山から発信することを強調した。挑戦的萌芽研究が取れたのは、松山からの発信をオリジナリティーと認めてくれたからだと思う。

毎年、科研で人（一流の研究者）を松山へ呼び、松山坊っちゃん会の講演会として市民に還元している。科研の計画を実施することが、そのまま地域の人々に喜ばれる（地域貢献といえよう）。わが松山坊っちゃん会は、講演者の足代も出せないから。

3 『坊っちゃん』出自の研究テーマと教員養成・授業とのつながり

「字体研究」は、漢字の構造を解明することであり、そこから漢字の習得への知見が得られる。また手書きの資料の字体の分析は、漢字の正誤の意識の問題になる。これも漢字学習につながる。この研究で得られたことを「初等国語」の授業に活かしている。

「自筆原稿の研究」は、110年前と現代との表記ルールの違いを教えてくれる。現代の表記ルールは唯一無二のものでも、永遠普遍のものでもなく、あくまで「現代」のルールであると相対化できた。これも「初等国語」の内容の充実につながる。手書き資料としての自筆原稿から、日本語の表記の特性・独自性が明らかになる。これは「日本語概説」の授業につながる。

「文学作品と方言」の分析から、今や方言は地域語としての働きよりも、近年注目される「役割語」としての側面が大きく、そのような視点から国語教材を読み直すことの必要性を教えてくれる。これは小学校での教育実習後の「省察研究」の授業で役立った。

以上は、いずれも「学習指導要領」の「伝統的な言語文化と国語の特質」に関わる。特に、漢字の正誤や表記ルールについては、現代のルールのみにとらわれすぎる視野の狭い教員になってもらいたくないという教員養成における自らの姿

勢の基盤となった。

「作家漱石の誕生」については、愛媛という地域に関わる人物に関わることであり、共通教育の「えひめ学」、附属高校との連携授業の「伊豫学」を担当する際に用いた。

4 まとめ

先に「三流の回避」と言ったが、これは冗談で言ったのではない。「一流」の研究者というのは持って生まれた資質も大きく影響するだろう。多くの大学教員は「一流」でも「三流」でもないところから出発する。ならば、「三流」にならない＝「二流」に踏みとどまるということは、実は、最も重大で切実な問題なのだ。

「二流」とどまることは、第一に自らのためである。研究者としてのオリジナリティーを発揮しつつ、責務を果たす（教員養成に貢献する）ことが生きる証となる。そして、構成員が皆「二流」以上であれば、その組織は組織としてかなりの力を持ったものになるだろう。

58歳の昨年、日本語学会の編集委員になった。これほど年を取っての編集委員は例が少ない（「一流」は40歳くらいで編集委員、50代なら理事）。しかし、声がかかったということは、何とか「二流」だと認めてもらっていると思えた。ならば、『坊っちゃん』と出会ったことで、「二流」に踏みとどまれたといえる。

松山に来るまで、『坊っちゃん』は読んでいなかったのに、今では、『坊っちゃん』成立論をぶつようになった。一昨年、BS日テレに出演、あこがれの余貴美子さんと話ができたのも『坊っちゃん』論のお陰。昨年の稲畑汀子さんとの講演、高校の先生方への講演も。

今年6月には、中国からの留学生と『坊っちゃん』の中国語訳との比較の話題で、NHKちきゅうラジオに出演できた。来年1月から3月には、愛大ミュージックで漱石没後100年・生誕150年記念の特別展『坊っちゃん』の110年を開催する予定である。さらに、次年度から、韓国語訳『坊っちゃん』を研究する法文学部の池貞姫先生との共同研究も計画している（科研に申請した）。

当初の研究テーマである「愛媛方言・方言アクセントの研究」はストップしたままであり、これは大いに反省している。しかし、それでも何とか自分なりに前進しているつもりである。

坊っちゃん曰く、「そんなものが出来る位なら四十円でこんな田舎へくるもんか」